

2026年4月30日

2025年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・共同研究(○) ・個人研究()	
研究代表者 (所属・職・氏名)	看護学部・教授・西田志穂	
研究課題名	コンピテンシー基盤型教育に基づく小児看護実践能力の習得を目指した授業デザインの検討および事例開発の試み	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
見戸祥能	看護学部・助教	計画実施、データ収集・分析・報告書作成補助
研究期間	2025年4月1日 ～ 2026年3月31日	

研究実績の概要(1)

【背景】

実習に関する教育改善の経緯

これまでの数年間、小児看護学実習の評価をチェックスタイルのルーブリックに変更し、その項目の検討、および、学生と教員間の評価の一致度等について調査を進めてきた。微調整を重ねながら、現在もルーブリック評価表は使用している。加えて、最終日に個別の面談を取り入れたことにより、学生自己評価とそれに対する教員の視点を共有でき、最終的な評価の乖離が少なくなった。

今回の研究計画に至った背景

本学の科目「小児看護学実習」では、臨地実習施設の確保が難しくなっており、特に、子どもの入院病棟での臨地実習が従前どおりには実施できなくなっている現状がある。新たな施設の開拓への努力も必要だが、即座の確保は難しく、当面は、学内実習と臨地実習を組み合わせた「ハイブリッド型」の実習を検討するのが現実的である。ハイブリッド型の実習を効果的に行うために、現在の実習方法を見直し、再構築する必要があると考えた。

【目的】

本研究は、本学の科目「小児看護学実習」の遂行に関連する諸問題を解決し、学生の学習の質の維持向上を目指した授業改善を目的に行う教育実践研究である。

学内実習と臨地実習を組み合わせた「ハイブリッド型」の小児看護学実習を教授するにあたり、インストラクショナルデザイン(ID)の基本的なプロセスモデルであるADDIEモデルにそって、教育内容の再構築を行うことを目的とする。

学生に期待されるコンピテンシーのうち、小児看護実践能力に焦点を当て、小児看護学演習科目の単元を想定して能力習得に向けた教育デザインを検討し、事例および学修活動の試案を作成した。

ここでは試案の一つを詳細に報告する。

研究実績の概要（2）

【方法】

ADDIE モデルの分析・設計・開発のプロセスにそって教育内容の構築を行った。

1 分析：小児看護実践能力に該当するコンピテンシーをコアカリから抽出し、抽出したコンピテンシーについて実習前到達目標のレベルを確認した。さらに、DP および小児看護学演習科目の到達目標との整合性を確認した。

2 設計：小児看護学演習科目における事例を用いた単元について、学修テーマ、学修目標、評価方法を設定した。

3 開発：学習教材事例と学修活動を作成した。

【結果】

1. 分析

コアカリの第一階層として示された基本的な資質・能力の 11 領域のうち、IP（多職種連携能力）と CS（患者ケアのための臨床スキル）を中心に小児看護実践能力として求められるコンピテンシーを第 2 階層レベルで絞り込んだ。つぎに、小児看護学演習科目の一単元として、事例を用いた看護過程を学ぶ授業をデザインする DP と科目の到達目標との整合性と既習内容を確認した。最後に、絞り込んだコンピテンシーの第 4 階層の内容を確認し、必要なものを抽出した。

2. 設計

学修テーマを「入院直後のこどもの症状の安定化を図る」として、次の 3 つの学修目標を設定した。

- 1) 患者情報をもとに、現時点での状態を把握しアセスメントできる。
- 2) 患者の状態と治療内容を結びつけ、必要な観察項目と評価の視点が説明できる。
- 3) 診療の補助および療養上の世話に関連する必要な看護援助が説明できる。

この目標を達成するための学修活動は、「教育用電子カルテから情報を収集し、アセスメントを行い、援助を抽出する」「抽出した援助を言語化する」とし、I-SBAR の手法を用いた報告内容を評価対象とした。

3. 開発

患者の設定は、呼吸器感染症により酸素需要のある幼児事例として作成し、患者情報は外来受診から入院直後までとした。この単元の学習内容は、入院直後時点における状態安定化にむけた看護が学習できる授業デザインとし、学生の学修活動を決定した。

具体的な活動内容は、1. 学習用電子カルテから情報を入手すること、2. 患者の状況をアセスメントすること、3. 入院直後に必要な看護を抽出することとした。これらの活動は、「一次評価」や「SAMPLE」の枠組みを用いた発問により、学生の思考プロセスを確認し、最終的に I-SBAR の手法を用いたスタイルで報告することで評価が行えるようにした。

【考察】

報告内容は、コンピテンシー基盤型の授業開発までの一試案であり、実践に進む前の段階にとどまっている。実施・評価のプロセスに進み、さらなる洗練が必要である。

【結語】

コンピテンシー基盤型教育に基づく授業をデザインするにあたり、今回のプロセスの適切性を評価し、他の単元拡大することが今後の課題である。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

発表済

西田志穂・見戸祥能（2025）．コンピテンシー基盤型教育に基づく小児看護実践能力の習得を目指した授業デザインの検討および事例開発の試み．第18回日本医療教授システム学会 総会・学術集会プログラム・抄録集，48．（2026年3月19日発表）

今後の発表予定

第19回日本医療教授システム学会総会・学術集会でのポスター発表（2027年3月開催）
共立女子大学看護学雑誌第13巻への投稿（2027年3月発刊）